

京都国立博物館明治古都館

ワークショップ「アイヌ民具にふれてみよう！」

3月13日(木)～23日(日)

衣服の着用や、民具と素材をさわる体験ができます。期間中は常時開催(混雑時やイベント開催時はお待ちいただく場合があります)

「マグネットしおりづくり」

3月22日(土)、23日(日) 11:00～12:00、各回先着30名

講師 飯岡都穂 旭川市博物館学芸員

衣服の文様のマグネットしおりをつくります

「京都大学榊太演習林のあった古丹岸周辺の榊太アイヌの話」

3月15日(土)、16日(日) 11:00～11:45

講師 宮川 琢 北海道立北方民族博物館学芸員

北海道立北方民族博物館所蔵の榊太アイヌの絵葉書や、ピウスツギが撮影した写真などをとおして、京都大学榊太演習林のあった古丹岸周辺の榊太アイヌのくらしを紹介します。

「北海道人松浦武四郎と京都」

3月15日(土) 14:00～15:00

講師 山本 命 松浦武四郎記念館館長

北海道やアイヌ民族と深く関わった松浦武四郎(三重県松阪市出身)は、晩年の天神信仰で北野天満宮などに神鏡を奉納しています。また、幕末に京都の本草学者山本亡羊とも交流しており、京都との関わりを紐解きながら、その生涯をたどります。

「北海道の地名について」

3月16日(日) 14:00～14:30

講師 森岡健治 国立アイヌ民族博物館教育普及室長

北海道内の地名は明治以降に漢字表記へと転換されます。しかし、その多くはもともとアイヌ語由来の意味があることを紹介します。

「松浦武四郎と物産会」

3月18日(火)、19日(水)、20日(木) 14:00～14:30

講師 永野正宏 文化庁国立アイヌ民族博物館運営推進調査官

幕末の京都で開かれた平安読書室物産会に、松浦武四郎が北海道内の生物標本を出品しています。そこで、武四郎と物産会、出品物の産地である北海道、ひいてはアイヌ民族との関わりについて紹介します。

「アイヌの装い」

3月21日(金) 14:00～14:30、23日(日) 16:00～16:30

講師 宮地 鼓 国立アイヌ民族博物館研究交流室室長補佐

アイヌの衣服は刺繍や本州から交易で入手した絹や木綿など多彩な布で文様が施されています。文様や素材、そしてさまざまな服飾品について紹介します。

「近現代アイヌ史のなかの〈京都〉」

3月22日(土) 15:30～16:30

講師 小川正人 北海道博物館学芸副館長、プンカラ運営委員会委員長

アイヌ史、特に近現代のアイヌ史には、〈京都〉にかかわることが、何度も登場します。それらの中からいくつかの事例をご紹介します。近現代のアイヌ史を京都という視点から考えます。

ウポポイPRイベント

「ウポポイのみどころ紹介-トゥレップも遊びにくるよ!」

3月22日(土) 14:00～14:30

23日(日) 13:00～13:30、15:00～15:30

トラりんと共に!一緒に記念撮影しませんか!



京都国立博物館明治古都館(京都府京都市東山区茶屋町527)

会 期:2025年3月13日(木)～23日(日)

休 館 日:月曜日

開館時間:9時30分～17時(入館は16時30分まで)

3月14日・21日は9時30分～20時(入館は19時30分まで)

参 加 費:無料、ただし京都国立博物館の観覧料が必要

(一般700円、大学生350円、高校生以下は無料)

京都文化博物館

映像上映イベント「アニメでみるアイヌのお話」

3月22日(土) 13:30～14:30

講師 内田祐一 文化庁アイヌ文化振興調査官

「オルシベ スウォフ」から「ハツカネズミが酒をつくった」ほかのアイヌの物語をもとにしたアニメを上映して、アイヌの物語世界やアイヌ文化について解説します。



京都文化博物館

(京都府京都市中京区高倉通り三条上る東片町623-1)

イベント:2025年3月22日(土)

参加費:無料、ただし京都文化博物館の観覧料が必要
(一般500円、大学生400円、高校生以下は無料)

京都府立図書館

アイヌの歴史や文化に関する図書のミニコーナー



京都府立図書館(京都府京都市左京区岡崎成勝寺町)

会 期:2025年3月13日(木)～23日(日)

休 館 日:月曜日

入 館 料:無料

国立アイヌ民族博物館



国立アイヌ民族博物館は、アイヌ民族の誇りが尊重される社会をめざし、多くの人にアイヌの歴史や文化を伝え、アイヌ文化を未来へつなげていくために、北海道白老町に設立されました。https://nam.go.jp



Punkar

プンカラ協働PRイベントは、アイヌ文化でつながる博物館等ネットワーク事業(愛称プンカラ)の事業として、国立アイヌ民族博物館と北海道を中心とした国内73の会員機関が連携・協力してアイヌ文化を紹介します。

衣服の着用、民具や素材をさわる体験、ワークショップやトークイベントなど、さまざまなイベントを開催します。そして、松浦武四郎をはじめとする、関西圏出身の人物とアイヌ文化との深い関わりを紹介します。

※プンカラはアイヌ語でブドウやサルナシなどの植物の蔓を意味し、ネットワーク事業の「繋がり」や「広がり」から連想した名称です。



イタ(盆)

京都でふれるアイヌ文化

会場

京都国立博物館明治古都館
京都文化博物館
京都府立図書館



アットウシ(樹皮衣)

Punkar network

KYOTO 2025

令和6年度プンカラ協働PRイベント



マキリ(小刀)

2025.

3.13 木

▶ 3.23 日

主催: 国立アイヌ民族博物館

共催: 松浦武四郎記念館

大黒屋光太夫記念館

石水博物館、京都文化博物館

京都府立図書館

協力: 京都国立博物館

後援: 北海道アイヌ協会



NATIONAL AINU MUSEUM
国立アイヌ民族博物館



ウポポイ
NATIONAL AINU MUSEUM and PARK
民族共生象徴空間

※キヤウト コタンは「京都」を表すアイヌ語です。19世紀のアイヌ語資料に登場します。

アイヌ民族について



舞踊(イヨマンテリムセ)の様子
白老(ウボボイ) 2020年

アイヌ語はアイヌ民族の独自の言語で、日本語とは別のことばです。語順など一部日本語と似ている部分もありますが、文法的には異なる部分が多くあります。かつては口頭でのみ使われてきましたが、現在は、従来のカタカナにはない文字(ド、ク、ブ、ハなど)も使いながら工夫して表記されています。

アイヌ語は北海道や樺太、千島、東北北部で話されてきたことばです。東北のアイヌ語については記録がなく、詳しいことはわかっていません。地域によって違いがあり、「標準語」とされるものはありません。

札幌や小樽など北海道の地名は、約8割がアイヌ語に由来すると言われています。明治以降にアイヌ語の音や意味に漢字やカタカナを当てはめて名付けられました。

アイヌ語は19世紀半ば以降、和人(本州以南にルーツを持つ人)の同化政策により生活の中から失われていきました。その結果、2009年、国連のユネスコによって消滅の危機にある言語と位置づけられました。

アイヌ民族は日本列島北部周辺、とりわけ北海道の先住民族です。狩猟や漁労、植物採集、それに交易を中心とした伝統的な生活を営んできました。そのなかで独自の言語であるアイヌ語をはじめ、ユカラ(英雄叙事詩)などの口承文芸やイヨマンテ(クマの霊送り)などの伝統的儀礼、木彫や刺繍にみられるアイヌ文様など多様で豊かな文化を発展させてきました。

他からの支配・制約などを受けない自律的な集団であったアイヌ民族でしたが、日本の近代国家の形成過程で、支配を受け、土地政策や同化政策の結果、生活の糧を得る場が狭められ困窮していきました。そのため、アイヌ語や儀礼など独自の文化の伝承も困難となりました。

しかし、今日においても、アイヌとしてのアイデンティティや独自の文化を失うことなく、民族としての伝統と誇りを受け継ぎ、文化を未来に伝承していくさまざまな取り組みが、多くの人たちの手によって各地で盛んにおこなわれています。



アイヌ民族の歴史について



請負商人の交易・経営拠点の様子
(出典:「東蝦夷夜話」大内餘庵 1861年 国立アイヌ民族博物館蔵)

北海道、樺太、千島に人類がやってきたのは30,000年前頃です。約2,400年前より、本州では稲作農耕が拡がりましたが、この地域では、それまでの知識や経験を活かした狩猟採集や漁労が続けられ、その後、雑穀農耕が加わり、海を越える交易も盛んになるなど特色ある文化が形成されていきました。

やがて、和人が交易のために北海道に移住し、居住範囲が広がるとアイヌとの間でさまざまな抗争が起きました。17世紀に入り、松前藩によって交易相手が次第に制限され、その後、交易を請け負った商人が漁場経営をする中で、多くのアイヌが漁場での労働に従事させられました。その間もシャクシャインの戦いなど和人との対立が起きました。

19世紀後半から、北海道に本州方面から多くの移民が入ってくる、それまでの伝統的な風習が禁止され、日本語の習得を勧められるといった同化政策によって生活は大きな打撃を受けました。戦後、差別に抗議し、貧しい暮らしを良くするため、世界の先住民族とも協力しながら、さまざまな活動をしてきました。

アイヌの儀礼

アイヌの世界観では、あらゆるものにラマツ(靈魂)が宿ると考えます。その中で、アイヌ(人間)にとって重要な働きをするもの、強い影響のあるものをカムイと呼びます。動物や植物、火や雷などの事象、山や川、それに人間がつくったものもカムイとされることがあります。アイヌはカムイと相互に関わりながら共に生活をし、日常的にも事あるごとにあらゆるカムイに感謝し、敬意、祈りを捧げます。一年を通じてさまざまな儀礼がおこなわれ、例えば、新しいチセ(家屋)の建設、狩猟や漁業への祈願、収穫の時期におこなわれる儀礼、それにイヨマンテに代表される霊送り儀礼などがあります。またチセの中では、炉に鎮座する火のカムイに日々祈りを捧げるほか、結婚式や出産の祝い、葬式なども営まれます。

カムイノミ(カムイへの祈り)のときには、酒を漆器の椀に注いで、イクパスイという祭具で神酒とともに祈り詞を届けます。

漆器の多くは本州方面から交易などによって入手され、儀礼や日常で欠くことのできない重要なものです。大型の漆器は、チセの中に飾られ、宝物として大切に扱われていました。



チセホブニレ(チセ送りの儀礼) 白老 2017年

アイヌの暮らし

チセ(家屋)は日常生活を送る場所であり、暮らしに必要な道具類も、チセの中でつくりだされてきました。アペオイなどと呼ぶ囲炉裏の炉縁の杭を削り台として用いて、男性はマキリ(小刀)で木を彫りだしました。弓や矢、マレクとよばれる突鉤などの狩猟や漁撈につかう道具、イタ(盆)や調理器具をつくり、独自の文様を刻みました。女性は樹皮からつくった糸で布を織り、刺繍を施して、アットウシ(樹皮衣)をつくり上げました。女の子は祖母や母から文様を習い、囲炉裏の灰で練習をしました。

現在は伝統的なチセでくらす人はいませんが、木彫、織りや編みの技術は受け継がれ、伝統的なものから現代アートまで、現代のチセにおいて、多種多様な作品がつくり続けられています。



現代工法で建てられたチセの内部
白老(ウボボイ) 2020年



「蝦夷漫画」
松浦武四郎 1859年
松浦武四郎記念館蔵